

高橋純名誉教授記念号の刊行にあたって

学長 和田 健 夫

高橋純先生は、1973年に東京外語大学フランス語学科をご卒業後、東京都立大学大学院人文科学研究科を経て、1979年4月から同大学人文学部助手を1年半務めた後、1980年10月に本学商学部講師として赴任、1981年10月同助教授(1991年10月からは言語センター助教授)、1992年10月同教授になられ、2013年3月に定年退職されました。定年後2年間の特任教授期間を含め、34年6ヶ月の長きにわたり、また、その間2000年2月から4年間国際交流センター長を努めるなど、本学の教育研究の発展や大学運営に多大の貢献をなされました。

高橋先生は、20世紀フランス文学がご専門で、アントナン・アルトー、レイモン・アベリオ、ステファヌ・リュパスコなどの研究やルイ・ポーウエル、ピエール・チュイリエ、ジャン・チュイリエ、アントナン・アルトーの著作の翻訳で知られています。とりわけ、アルトー研究は、大学院時代からのテーマで、「ARTAUDの狂気または生と作品の通底器」(フランス語フランス文学研究33号、1978年)をはじめ、「主体から身体へ(I)～(VII)」(人文研究62～78輯、1981～1986年)、「アルトーの二つの『上奏文』」(同82輯、1991年)、「もうひとつの《地下鉄の手記》について—アルトーの『神経の秤』再読」(同115輯、2008年)など数多くの論文を発表されています。他方で、リュパスコの認識理論の研究にも力を注がれ、この分野では、「*Du logique et de l'être chez Stéphane LUPASCO*」(人文研究83輯、1992年)、「*Stéphane Lupasco: Présentation bibliographique*」(Language Studies:小樽商科大学言語センター広報4号、1996年)、「*La Métaphore Isomorphe entre Science et Gnose*」(人文研究91輯、1996年)などの成果を残されています。なお、この研究テーマ

では、先生は1994年3月から1995年にかけてフランスで在外研究をなされました。

先生の研究の広さを示すものとして、本学の卒業生である小林多喜二とフランス文学界の関係を取り扱ったいくつかの論考があります。すなわち、『『ユマニテ』紙の小林多喜二追悼記事』（Language Studies:小樽商科大学言語センター広報17号、2009年）、「多喜二とロマン・ロラン：伝説の〈事実〉と〈真実〉」（人文研究118輯、2009年）「多喜二生前の国際的評価：1932年にみられるその一端」（『2012年小樽小林多喜二国際シンポジウム報告集：多喜二の文学、世界へ』小樽商科大学出版会、2013年所収）などであります。

教育の面では、先生は、「フランス語」「外国文学」「国際コミュニケーション」の講義のほか、長く「研究指導（ゼミ）」を担当されました。研究指導では、フランス文化の研究がテーマでしたが、先生の指導方針は、学生を個別に指導するのではなく、先生が語るフランス文化・言語の諸相の中から学生自ら研究テーマを選び学ぶのを待つという、学生の自主性、個の力を重んじるものでありました。歴史、文化、文学、哲学等に興味をもつ学生が、あらゆる学科から集まり、商大らしい自由闊達なゼミが展開されました（「高橋純ゼミナール（フランス語）」緑丘115号、2014年）。

先生の飽くなき研究心は、退職後も、先生を新たな研究テーマに駆り立てていることと思います。一層のご活躍を期待するとともに、私どもへの変わらぬご指導をお願いする次第であります。